

## 林業構造問題研究をめぐって

福島 康 記

林業経済研究所については、今でも思い出すのは、麴町の木立に囲まれた木造の事務所のことです。うす暗い建物のなかで早尾丑麿氏が、どの馬の骨か解らない学生に何度かいろんな話を聞かせてくれました。いま考えてみると、政策のことは勿論ですが、林野制度の関係でも聴いておくことが沢山あったのだと悔まれることです。

そのころ、つまり私が大学院にいた五〇年代後半期になりますが、それから六〇年代前半期までちょうど基本問題から基本法制定をめぐる論議が盛んなときであつたわけですが、そのころに出た論文が、今でも私には興味深く思われるのです。その中でとくに印象に残るのは、岡村明達氏と鈴木尚夫氏のもです。「林業経済」の論文でいうと、岡村氏の「林業資本主義化の諸問題」上・下（五七年六・七月）、「日本林業における構造問題」（六一年一月）ほかと鈴木氏の「林業における利潤と地代」（五九年三月）があげられます。

農地改革の評価に関し林野所有の性格をどう考えたらよいのかといった問題を手掛かりに大学院に入った私には、岡村氏の論説は大変魅力のあるものでした。その全体的な評価については、鈴木氏編「現代林業経済論」のなかに書いておきましたが、林業経済論をただ木材増産のための理論とか、単純な近代化論といった性格のものと考えている人達が多かつた当時に、林業構造を正確にとらえ問題提起をしている内容は、今でもその有効性を失わないものと考えています。そしてまた、氏が問題としたのは、林業における国家の関わり、その役割の大きいことです。

この点はとくに強調しておいてよいと考えます。

構造問題についても少し具体的な言い方をすると、林業の資本とか労働力のことはみな問題とし、その運動法則や関係を熱心に追うけれども土地所有のことは問題外であったり、せいぜい私的所有の零細という物理的な制約や資源支配の恣意性といった一つの傾向の問題として抽象的にいうだけのことで、私には説得力が小さいように感じられました。木材増産のためならなおさら私有以外の土地所有をも含む全構造的な問題の捉え方が必要だとおもうことですが、そういう研究状況はずっと続いているように思います。所有制一般の問題としても、林野所有の歴史的性格とその変化の過程をたどるのは大変興味のある課題だと思うのです。国家的土地所有ほかさまざまな土地所有形態の存在の論理は、いままさに、求められていると考えます。

そう考える私ですがある種の論理的な混沌というべきものから抜け出られなかったところがあり、農民造林をテーマに論文を書くことになりました。林業自体が農民的生産の対象として発展しえないのか、こんな疑問をその後も持ち続けたわけです。基本問題答申に対する批判としていわれた農業論理の機械的適用というのか、林業にたいする身びいきの結果ということでしょうか。このへんについても「現代林業経済論」のなかで、ある帰結は述べておきました。

鈴木尚夫氏については、その五〇年代のどん詰まりになるわけですが、現山林会副会長の倉沢先生が座長で研究会が続けられていました。鈴木さんは研究会の中心的人物の一人として、私も参加させて貰っていました。調査課長の横尾氏も忙しいなかをよく出ておられました。沢山の調査報告書を整理し基本問題検討の資料をつくるという目的だったのでしょうが、みな自分なりの論理を組み立てるのに懸命だったことを覚えています。この研究会の成

果は「日本林業の生産構造」という本に纏められました。

それからですからだいたいぶちますが、鈴木さんには現在に至るまで随分研究上お世話になっています。しかし、いわゆる鈴木地地論の論理過程がどうしても納得できず、生産構造研究会の席で氏の森林経営の性格の説明にいつでも私が異議を申し立てたのです。その度に、場合によって次回までに工夫をしてこれ、少しでも模様替えしていちいち克明に説明し説得しようとしたのですが、氏のその態度は今でも鮮明に思い出されます。いま私がそれよりずっと年上になって考えても、真似のできないことだと思うのです。

鈴木氏の林業資本が利子生み資本だとか土地改良資本だとする説ですが、現実的なさまざまの条件があつてそういう性格が現れているのであつて抽象理論のレベルの問題ではないと私は思うのですが、氏はどうしても抽象理論レベルの問題として組み立てようとするわけですね。正確には抽象理論と現実を結ぶ理論ということでしょうか。失礼なような言い方になって恐縮ですが、柱を立ててそれを中心に他の一切の構築物をその上に並べ体系化しようとする作業は迫力があり、説得力を持つてくることは事実なのです。私は結局、氏の論証しようとしていることを別の論理過程で説明しようと作業してきたようなものです。あとはいま書きましたように、所有とか経営の性格について具体的歴史的に論証する作業があると考えています。

これらを含めて当時多くの論文が扱った構造問題は、今ではどういう位置付けが与えられるのでしょうか。現今は森林が大事で林業は二の次のように言われるのですが、そこで林業、もつと詳しく言えば林業構造は問題にならないのか、常々疑問に思っているところです。森林さえ整備されればよいのか。森林の整備のさい所有規模の偏りとか経営に対する所有の優越とかいう問題はやはり問題ではないのでしょうか。林道をつければよいといっても同

様でしょう。とくにそういう構造問題のひとつの現実的・政策的な帰結としていわゆる機関造林の進展がみられるのですが、いまの段階で構造問題をきっちり詰める必要があると私は考えています。

ここ数年、財界の森林・林業に関する提言が相次いでいますが、それらをみて問題だと思うのはやはり林業構造というものの理解の仕方の曖昧さです。

構造問題の現段階についてですが、林業自体が森林問題というような広い社会的関連をもつようになり、また、林業を含む経済体制はより広範かつ相互に密接な関連をもつようになっていきます。外材や工業生産力発展の結果としての代替材の問題もあり、経済体制が当時とは比較にならないほどの展開をみています。ただ森林の整備のこともやみくもに強調するだけでなく、政府の土地政策とか金融・税制一般のもっと広い関連のなかでも、いま林業構造問題を克明に分析してみる必要があるのではないのでしょうか。

(東京大学農学部教授)